

鴨川がはぐくむ文化——観光資源としての川辺

天理大学准教授 西野 由紀

一. 避暑の好適地

京都の気候について知るひとのおおくは、「寒暑が厳しい」という印象を共有しているのではないだろうか。盆地という地勢によりもたらされるこの印象は、現代にかぎらず、それぞれの時代を生きたひとびとにも共通していたはずである。

安政2年(1855)、出羽国庄内の清川村から老母をともない上京した清河八郎は、旅日記『西遊草』のなかで次のように記している。

午時は熱して中々出る事の叶わぬ故、旅舎にた
たずみけれども、やはりたへがたき事まあり。

筆者はのちに新撰組の前身である浪士隊を率いたことで知られる人物である。東北からやってきた八郎親子にとって水無月の京はこたえたようで、酷暑に苦しんだことを随所に記している。また、江戸最員の八郎は京坂の風俗や文化を貶すことが多く、かの祇園御霊会(現在の祇園祭)さえ「張合の抜たる祭礼」と言い放つ。一方、八郎が評価した数少ないもののひとつに「四条涼」がある。これは祇園御霊会にあわせ鴨川の四条河原でおこなわれた夜間の納涼行事で、次のように評している。

此四条涼は屋根のかざりもなく、美なる様もあらざるに、清泉に足をひたし、清風に身を翻す、誰人のさへぎるものもあらで、三伏の熱をわする、是炎時の極楽地ともいふべし。

三伏とは初伏・中伏・末伏をいい、それぞれ夏至以降の三度目・四度目・立秋以降のはじめの庚にあたる日をさす。夏でもっとも暑いとされる時期である。この「炎時の極楽地」が「京師第一の奇観、第一の佳勝」なのだといふ八郎は讚える。

清河八郎のいう「京師第一の奇観、第一の佳勝」である四条河原の夕涼について、江戸時代の地誌や日記、随筆をてがかりにして探してみたい。

二. 地誌のなかの四条河原の夕涼

まずは、地誌にみえる記述を確認したい。延宝4年(1676)に著された年中行事書である『日次紀事』に、六月の行事として次のとおり紹介されている。

初七日〔神事〕祇園會(中略)凡ソ今夜自り十八日ノ夜ニ至テ四條河原水陸寸地ヲ漏サズ床ヲ並ヘ席ヲ設ケ良賤般樂ス。東西ノ茶店挑燈ヲ張り行燈ヲ設ケ恰モ白晝ノ如シ。是ヲ涼ミト謂フ。其ノ中十三日ノ夜ニ至テ殊ニ甚シ。是レ夜

宮ニ因テ也。

これによると、四条夕涼は祇園御霊会にあわせておこなわれ、6月7日から18日に開催されていたことが知られる。

元禄17年(1704)に出版された地誌『宝永花洛細見図』巻六には夕涼を描く挿図(図-1)が載り、図の上部には「六月七日自十八日迄四条川原すずみあり」とその開催期間が記されている。これをみると、川中に床几がもうけられ、そこで男女や歌舞伎妓らが酒食・音曲などに興じるようすがわかる。

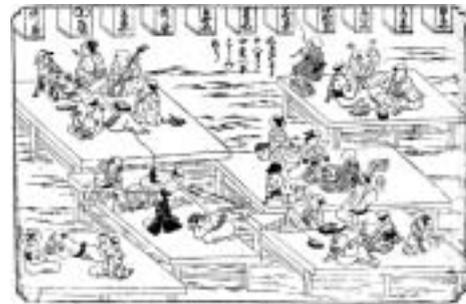


図-1 『宝永花洛細見図』巻六
(出典：京都大学附属図書館所蔵)

安永9年(1780)に出版された地誌『都名所図会』巻二のうち、「四条河原夕涼」の項目は開催期間を明示したあと次のように続く。

東西の青楼よりは川辺に床を設け、燈は星の如く、河原には床几をつらねて流光に宴を催し、濃紫の帽子は河風に翩翩として色よき美少年の月の明きにおもはゆかざす扇のなまめきてみやびやかなれば、心もいとゞきそひてめかれせずそゝなるに、妓婦の今を盛といるはへて芙蓉も及ばざる粧ひ、蘭麝のこまやかに薫り、南へ行北へ行。淹茶の店に休ふては山吹の花香に酔を醒し、香煎には鴨川の流を汲んで京の水の軽を賞し、かる口咄は晋の郭象にも勝れて懸河の水を注が如し。物真似は函谷関にもおとらぬかや。猿狂言、犬のすまひ、曲馬曲枕、麒麟の縄渡は鞦韆の俤にして、哨吶の声かまびすく、心太の店には瀧水涓々と流て暑を避、硝子の音は珊々と飴して涼風をまねく。和漢の名鳥、深山の猛獣も、ここに集て觀とし、貴賤群をなして川辺に遊宴するも、御菰川の例にして、小蠅なす神を退散し、牛頭天皇の蘇民将来に教給ふ夏はらへの遺法なるべし。

これまで紹介した文献に比すると、文章量が大幅

に増えている。ここを訪れた客層、河原の露店で扱っていた商品や小屋の演し物について詳述している点、祇園御霊会とのかかわりから「牛頭天皇」「夏はらへ」の語がみえる点が、とくに興味深い。くわえて、『宝永花洛細見図』の図よりもひいたアングルで描かれた挿図が収載されている。(図-2)



図-2 『都名所図会』巻二「四条河原夕涼之躰」

寛政11年(1799)に出版された地誌『都林泉名勝図会』巻一には、「みな月なかば半、祇園の夕涼に美艶を粧ふ風姿のゆきき、万燈水の流に輝き、河原表の壯観、みな平天下の謳歌なるべし」という簡略な解説とともに、夕涼でにぎわう四条河原西側のようすを描いた挿図が載る。(図-3は二枚続きのうちの後半部) 図の左下にみえるのが鴨川で、砂州に香煎や西瓜を売る露店、落語や小芝居の小屋が建ちならんでいたことがわかる。



図-3 『都林泉名勝図会』巻一「夕涼其貳」

三. 旅人にとっての四条河原の夕涼

戯作者として知られる曲亭馬琴は『鞆旅漫録』のなかで「京によきもの三ツ、女子、加茂川の水、寺社」と評している。その「長く流れて水きよらか」な点を高く評価していることや、江戸最頂であることが、先述の清河八郎と共通している。では馬琴はこの夕涼をみてどのように記述しているのか。おなじく『鞆旅漫録』をみてみたい。

納涼は四条・二条の河原よし。四条には義太夫或は見せもの等いろいろあり。二条河原には大弓・楊弓・見せ物あれど四条尤にぎはへり。しかれども河原は昼の炎暑に石やけて、ほてりい

まださめず。流れに水みちて人すくなければ、かへりて二条、四条にまされり。

「見てすずしきもの、ただすの御洗井、かも川の流れ」と褒める馬琴ではあるものの、実際の河原での納涼は「ほてりいまださめず」と表現している。見るにはよいが実態は異なるということであろう。さておき、殷賑を楽しむならば四条、涼を求めるならば二条と判じていることがわかる。

曲亭馬琴は享和2年(1802)の記録である。さかのぼって、明和3年(1766)に上京した木室卯雲の感想をみてみたい。『見た京物語』には次のように記されている。

四条のすずみに所々芝居あり。みなかるわざ見せもの等なり。爰に明りのため、松のひでを焚く。芝居葎簀圍ひなれば表へすき通り、悉くよく見える。夫を三条の橋などより見わたせば、挑灯もおびただしく火もみゆるゆゑ、江戸の火事場の如し。

八郎や馬琴よりやや軟化するが、京の文化を「かみしめてむまみなし」「きれいなれど、どこやらさびし」と表現する卯雲もまた、江戸最頂であることにかわりない。その卯雲が「江戸の火事場」のようだと記しているのは、火事場のにぎやかさにイメージをかさねた、好意的な評価だといえるだろう。

四. 文化という観光資源

本稿でとりあげた四条河原の夕涼については、ほかに円山応挙や鳥居清永、歌川広重、歌川国芳らの作品にも描かれている。これらの図像は、京の夏の風物としての夕涼のイメージをひとつひとつにうえつける役割をはたしたと考えられる。酷暑にみまわれる京の地勢を逆手にとった文化が、見物するに足る「名所」として定着したのである。地誌や絵画によって定着したこのイメージは、他郷から京を訪れる旅人の日記や随筆により、再生産されることになる。実際に、清河八郎、曲亭馬琴、木室卯雲以外にも、本居宣長などおおくの文人墨客がここを訪れている。

その評価が好意的であれ批判的であれ、いまだ名所を見ぬ読者の「見たい」という欲求は誘発される。現在でも、四条河原の夕涼の風景を彷彿とさせる鴨川畔の川床やそれぞれのパーソナル・スペースを確保しながら等間隔にならぶといわれる川縁のカップルなどがガイドブックに紹介され、そのガイドブックをみた旅行者が見物に訪れる。これは江戸時代と同様の現象であるといえる。

親水空間としての鴨川の活用方法を検討するとき、このような歴史的資料にヒントが隠されていることもあるのではないだろうか。